

## 「告白」を読んで

「事実は、小説より奇なり」と云われるノンフィクション物に興味ある自分だけに、  
拉致被害者：曾我ひとみさんのご主人のジェンキンスさんの手記「告白」を発売日の午後  
にを購入に行ったが、既に売り切れ。

店員から「予約受け賜りますが…」と勧められたが、今のところ数冊の積読あるので、  
またの機会に書店で目にすれば…と、予約しなかった。後日、街にでかけた折、書店で目  
にしたので早速購入。

北朝鮮関係の書籍では、大韓航空機事故の「金賢姫」の手記、「喜び組」の手記、また、  
拉致関係では「奪還」等の手記を目にしていただけに、「告白」の背景の予備知識もあつ  
たせいか、読み出すと、これが中断できずに一気に読み終えた。

著者は、書籍の最後に、娘さん2人が抱いている将来の夢に触れてた後、「いずれにし  
る娘たちが自分で決めることだ。娘たちが今、そんな選択の自由がある社会で暮らしてい  
ることをありがたく思う。どのような人間になるか、全ては自分自身の選択にかかっている  
のだ。そのことを私は、誰よりもよく知っている。」の一文で締めくくっている。

家庭内の日常生活の言動すら監視される生活を強いられてきた著者の使う「自由」の言  
葉だけに、改めて「自由」の言葉の重みを感じさせられた。

また、「自由」がないところには、一人一人の人間の生命の尊厳、尊重がないことも改  
めて気づかされた。

「自由」が空気のように当たり前と思って生活をしている我々に、「自由」の意味の重  
大さ、「自由」を守ることの大切さを促される書でもあった。

一方、拉致問題は、既にマスコミ等で多く報道され見聞していただけない、マスコミ報道  
と手記の異なりを感じさせられた。マスコミ報道やコメンテーターにより、如何にフィク  
ションが作られていくかも気づかされた。言論の「自由」な社会だけに、その怖さの一面  
ということか…。

やはり、溢れる情報から事実に近い情報を読み取る選択は、「自由」であるだけに自己  
責任を伴うということか。

色んな問題も、当人、当事者の言を聞いてみる大事さを再認識した。

だからこそ、自分は書籍でも、フィクションものよりノンフィクションものに引かれるの  
かも…。

(2005年10月23日 記)